

## 英語・英語活動

### ■語る会に向けての検討の経緯■

(1) 語る会に向けての検討の経緯：論点と提案  
英語部会では、ほかの部会とは少々異なる特質がある。それは、中学校では英語教育が教科として行われているが、小学校では教科として行わず、学校が創意工夫して英語活動として行っているという点である。その点をふまえつつ、まずは小学校と中学校の望ましい連携・接続のあり方を明らかにしていくことを基本路線として部会の話し合いを深めていくことにした。

#### 〈第1回〉

##### ○児童・生徒の実態から見た英語に関わる情報交換

〈小〉英語活動は、各学年が年間17時間実施する計画がたてられている。しかし、その取り組み内容の深さには、担任による個人差がある。その理由には、計画が単元配列程度のものであること、教材が十分に準備されていないこと等が挙げられた。

〈中〉様々な小学校から進学してくる中学校では、入学した時点で英語教育の経験の実態がバラバラである。小学校段階で英語塾に通っている子どももいる。入学時から個々の実態が違う状況から、英語の教科学習を始めることに難しさがある。また、学年が上がるにつれて、コミュニケーションをとることが難しくなっていくことをどうクリアしていけばよいかという課題もある。

→中学校への接続として小学校の英語活動のあり方を考えた時、コミュニケーションを重視した活動をつくりあげていくことを確認した。

#### 〈第2回〉

##### ○お互いの学習内容を知り合う

小学校から英語活動の年間単元配当表を、中学校からは3カ年の教科書を持ち寄り、それぞれの学習内容について語り合う時間をもった。その結果、中学校の授業で使われている会話や場面設定が、小学校でもそのまま使われている状況が見えてきた。小学校と中学校で繰り返されることには意味があるものの、そこで扱われる単語や文章の難しさには当然差異がある。それが、スムーズに行われる計画をたてていくことが大切であることを確認した。

また、今後一貫教育が行われるなら、英語学習を深めていくために、ALTが学校に常駐している環境が必要だろう。少なくとも、外国の方が授業に入っていただけるような環境を、大学とともに整備していくことを確認した。

#### 〈第3回〉

##### ○「幼小中一貫教育を語る会」において実施する内容の決定

・テーマ別分科会を開くことに決定。

#### 〈第4回〉

##### ○テーマ別分科会の詳細及び今後の活動について

・テーマを「英語科と英語活動の接続」とし、サブテーマに「今、何が課題か」を設定した。現状と課題をさらに明確にしていくことにより、これからの接続のあり方について深める機会とすることを目的とすることにした。

・今後の活動として、お互いに小中それぞれの実践を見合うことを確認した。

#### 〈第5・6回〉

##### ○小中お互いの授業を見合う

・中学校における1年生の授業、小学校における5年生の英語活動をお互いに参観し、授業から見える子どもの実態について話し合いを行った。お互いが感じたことは、学習場面におけるコミュニケーションのとり方が比較的スムーズに行われているということであった。

・小学校の授業では、担任が進行する中で、中学校の先生に単語の発音を教えてもらう場面を設けたが、正しい英語の発音をすることに興味を覚えた子どもがたくさん見られた。

#### 〈第7回〉

##### ○「幼小中一貫教育を語る会」の詳細

・「教科リード」の検討  
・テーマ別分科会における役割の確認

#### 〈第8回〉

##### ○単元配列表のあり方の検討

・中学校教員の小学校への乗り入れをどう考えるか。小学校の英語活動をいつ始めるのか。以上の2点について話し合いが行われた。乗り入れについては、6年生の計画の中に年間5時間程度の乗り入れを実施することを念頭においた計画を作成することとした。また、英語活動の開始時期については、暮らしにおける子どもたちの実態を考慮し、3年生からの実施を原則におき、計画をたてることとした。

→小学校の英語活動のねらいは、異文化交流なのか、中学校への慣れとしての活動なのか、英語活動の目的を明確にしていく必要がある。

#### 〈第9回〉

##### ○単元配列表の検討

・小学校英語活動の配列表の検討を行った。原則として、各学年17時間とした。各学年で内容を異なるものにしてもよいが、同じテーマで2学年をかけて学習し、その中で言語材料や学習の仕方を変えた授業を展開していくことも有効ではないかという考えが出された。

・小学生への乗り入れ授業については、新しい教員との出会いという場面を考慮した1つの小単元を1学期に行うこと、中学生の選択授業と6年生の交流授業を実施する可能性をめざした小単元を2学期に設定することを計画していくこととした。

#### 〈第10回〉

##### ○研究集録と単元配列表の検討

## 英語活動と英語科の接続 ～今、何が課題か～

### 1. 現状と課題

#### (1) 小学校の現状と課題

本校は2003年度から英語活動をスタートさせ、年間17時間の計画で行ってきた。言葉を身につけるためには、まず音声にたっぴりと親しむことが大切であると考え、音声面からアプローチするように十分配慮し、楽しいゲームなどの活動を通して学習することを大切にして、「楽しみながらいつの間にか身についた英語」の実現を目指した。そのためには、子どもが夢中になれる活動を展開し、その中に英語・発話を促す機会を盛り込むようにする。教師は1単位時間で新出単語を覚えさせようとするような性急な構えではなく、「忘れてもいい」「少々まちがえてもいい」ぐらいの構えをもって指導にあたった。そこで扱う言語材料を1回の遊びやゲームで終わらせることなく、期間をおいて数回繰り返しながら、少しずつ身につけることができるようにした。

このようにして3年間実践したところ、下記の点を課題として見つけるに至った。

①英語活動で取り扱う内容は定められていない。内容や活動を、教師が創意工夫することが求められる。逆に言えば、その都度、授業展開を生み出さなくてはならず、教具の準備等負担が大きい。そのため、担任によって授業へ臨む構え（自信）や内容、質に差が見られる。

②学習内容に対する評価基準がなく、関心・意欲・態度面のみしか評価していないため、実際に英語活動でコミュニケーション能力が身に付いているかどうか客観的に把握できない。ALTがいない本校では、「担任だけでできる英語活動」を目指したが、英語の発音やリズム、会話としての生の英語にふれておらず、コミュニケーションとしての英語というより、活動するための英語になっているきらいがある。

これらの課題を抱えながら、さらに今、小中学校の一貫教育の視点に立った時、中学校の英語科との接続において、効果的な英語活動でありえたかどうか疑問が残る。英語活動導入時では、新鮮さもあり、子どもたちの英語に対する興味・関心を非常に高めたが、導入されてすべての児童が6年間学び続けるという状況に移行してきつつある時に、あまりに中学校の内容を先取りして、中学校での教材と出会う新鮮さや喜びを失わせていないか、内容が疲労して英語嫌いな児童を作り出していないか危惧するという声もあがっている。

#### (2) 中学校の現状と課題

附属中学校では、必修教科（英語）として、各学年とも週3時間、年間105時間の英語の授業を行っている。また、選択教科（英語）の授業時数は、第2学年で後期35時間、第3学年では前期35時間・後期8時間である。英語の学習意欲は概ね高く、技能面でも多くの生徒が「概ね満足」以上の評価である。

本稿では、接続期にあたる中学校第1学年の必修教科（英語）を中心に述べることにする。本校は、例年30～40の小学校から新入生を迎えてきた。そのため、それぞれの小学校で多種多様な英語活動を経験してきた生徒が、1つの教室で同時に「入門期の英語学習者」として学習をすることになる。また、英会話教室等で英語に接してきた生徒も増加しており、入門期でありながら生徒の英語学習に対するレディネスには大きな差があるのが現状である。

入門期の学習で工夫しているところは

- 英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ時間を多くとること
- 音声から文字への以降がスムーズに行えるよう配慮すること
- 文字の学習を始めてから、文字が定着するまでの学習活動を段階的に工夫すること
- 学習者のレディネスの差をマイナス要素ととらえず、いかに生かすかを考えること等である。

具体的には、今年度の1年生では教科書に入る前に12時間の英語の音声に慣れ親しむ時間をとり、その中で次第に文字にも慣れるようにした。入門期の学習者にとっては文字の学習がハードルとなることが多いため、各個人のレディネスの違いに配慮しつつ、飽きずにかつ意欲を持って学習内容の定着が図れるよう工夫を重ねているところである。

### (3) まとめ

附属小学校・中学校における上記の課題は、現在の公立小学校・中学校が英語活動/教育について抱えている問題と同一であるといつてよい。すなわち、小学校においては研修が十分に保証されていない中で非専門家集団が手探りで英語活動を運営している現状があり、また中学校においては、英語学習に関して異なる背景を持つ生徒に対してどのように入門期の授業を行うかが課題となっている。とりわけ小学校の英語活動は「なぜ英語なのか」という目的、および「どこまで身につけるべきか」という目標が必ずしも明確に定まっておらず、その分多くの困難に直面している。

仮に国際理解・異文化体験を主たる目的とし、英語の習得を目的としないものを「英語活動」、英語の運用能力育成を主たる目的とするものを「英語科」と定義するならば、一貫教育における具体的な課題は、つまるところ9年間の中で英語活動と英語科をどのように配分してカリキュラムを組み立てていくかということになる。現在中学校で英語科として行われている内容の一部を、小学校段階へと前倒しすることも可能性として挙げてこよう。中学校の側からは、中学校1年生進学時にどの程度のレディネスを期待するのかを要望し、小学校の側からは「ここまではできる/これはできない」ということを率直に意見し合う中で、最適なカリキュラムを構築していく必要がある。

その際に重要なのは、小学校段階での英語活動/英語科の「費用対効果」を次の2つの観点からどのように評価するかということである。1つは、最大9年間の英語教育全体の中で小学校段階の英語活動/英語科がどのような効果があるのかという観点であり、もう1つは、現在の小学校カリキュラム全体の中で英語活動/英語科がどの程度のウェイトを占めるべきかという観点である。授業時間数および教員数が限られている以上、これらの点は真剣に検討されるべきである。附属小学校におけるこれまでの実践や全国各地の報告、さらに第二言語習得に関する知見なども参考にしながら、よりよい一貫教育のありかたを探っていきたい。

## 2. 一貫教育に向けて、大切にしたいこと

英語活動・英語科において一貫教育を構想するにあたり、まず大切にすべきは児童・生徒主体に発想するというのではないだろうか。「一貫教育をしなければならないからする」のではなく、小中学校で連携して、児童生徒が最も意欲を持って効果的にそれぞれの学習活動に取り組める時期を明らかにしていき、児童生徒にとって最も適した時期に当該の言語材料の習得や言語活動を行えるようにしていくことが重要であると考えられる。

## ■分科会の整理と総括■

### 1 講演「小中連携の現状と課題：論点の整理のために」

講演者 縄田 裕幸

- ・ 小学校における英語活動の目的をはっきりさせることが大切である。
- ・ どのような効果があるのかをはっきりさせることも大切である。
- ・ 小学校教育では国際コミュニケーションを重視する立場と英語スキルを重視する立場がある。
- ・ 小学校英語の言語習得上の有効性については、年齢が低ければ低いほどということが今信じられているが、それは母語習得に関しては事実であり、学校での第2言語習得に関しては関係がない。
- ・ 言語教育一環としての英語活動については、中学校に入ってくる子どもたちにどれだけのレディネスを期待するのか。

### 2 小学校における英語活動の取り組みについて

- ・ 音声面を重視し、楽しみながら行ってきた。新出単語も紹介するがテスト等での評価は実施していない。
- ・ ビデオでの活動紹介(5年生)
- ・ 3年間の成果と課題として、次のようなことがあげられる。
  - ・ 活動を通して外国人に臆せず接することができた。
  - ・ 計画、教材づくりの負担が大きいこと。
  - ・ 教員によって指導に差が出ること。
  - ・ アンケートでも多くの教師が負担に感じていて、自信を持っていないこと。
  - ・ どのくらいの力がついたのかの評価ができないこと。
  - ・ 中学校の内容を先取りし過ぎて、子どもたちの意欲を低下させるのではないか。
  - ・ 隔週1時間だけでは習得は難しいのではないかということ。

### 3 中学校における英語科の取り組みについて

- ・ 3年間の教育課程の説明。
  - ・ 各学年とも週3時間、年間105時間の授業を行っている。
  - ・ 選択授業の時数は第2学年で後期35時間、第3学年では前期35時間・後期8時間である。
- ・ 各学年での取り組みを説明。
  - ・ 各学年ともスピーチ活動を実施している。
- ・ ビデオでの活動報告(スピーチ活動)
- ・ 接続期における課題とそれに対する工夫
  - ・ 入学時において、すでにいろいろな面(学力、スキル、レディネス)で差がある。そこで、1年生では教科書に入る前に12時間の英語の音声に慣れ親しむ時間をとり、その中で次第に文字にも慣れるようにしている。

### 4 まとめ

- ・ コミュニケーション重視といってもある程度スキルを教えていく必要がある。
- ・ 楽しい活動ばかり無計画に行うのではなく、目的を持って計画的に行うことが大切。
- ・ 小中の情報交換が大切になってくる。